

<花月>の「春の遊び」：花月の弓と「小弓」 をめぐって

伊海, 孝充 / IKAI, Takamitsu

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

44

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2006-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010128>

〈花月〉の「春の遊び」

—花月の弓と「小弓」をめぐって—

一 芸尽くしと美少年趣味

能(花月)は喝食・花月(シテ)が生き別れとなっていた父親(ワキ)と再会する物語である。この曲は、親子の邂逅譚において見所になることの多い父子恩愛の情趣が希薄で、次々と展開されるシテの芸の方が大きな眼目となっている。能の中でもひととき華やかなこの曲は、従来二つの側面から論じられることが多かった。

一つは小歌・弓の物まね・清水寺の曲舞・羯鼓・山廻りと多くの芸を連ねる「芸尽くし」という一面である。〈花月〉は、『三道』の中で「放下には自然居士・花月・東岸居士・西岸居士などの遊狂」と芸尽くしの名曲(自然居士)などと列挙されており、世阿弥時代から「遊狂」という舞歌の芸を見せるのにふさわしい風体を基にした代表曲として認識されていた。また、生

伊海 孝充

き別れになっていた父子が再会するという筋書きとなっているので、同様の話柄であり、なおかつシテの芸を見所とする物狂能との影響関係が論じられることも多い。^(注1)

もう一つは「美少年趣味」という一面である。中世の寺院での稚児愛玩については、つとに有名であるが、そうした趣きが〈花月〉からも見て取れるのである。花月の登場を待つ寺の男(アイ)の姿からもこうした趣向は看取できるが、もつとも顕著なのは「小歌」の場面であろう。室町期に流行した小歌節を応用した「小歌」は、〈放下僧〉(芦刈)といった曲にもあり、能の中では音曲的に特徴のある小段となっている。〈花月〉のそれは、「小歌」の中でも謡い方に特徴があるが、

シテ/来しかたより、地/今の世までも、絶えせぬものは、
恋といへる曲者、げに恋は曲者、くせものかな、身はさ
らさらさら、さあら、さらさらさらり、恋こそ寝られね。

と謡われる詞章の内容や、演技の仕方でも特異性があり、ここか

ら男色的要素が垣間見られるのである。現行の演出ではアイ(寺近くの男)がシテの前に立ち、扇で口や顔を覆い、シテはアイの肩に手を置き、この「小歌」の謡と共に舞台を回るのである。徳江元正氏によれば、大藏流茂山家では、シテがアイの腰に手を掛けるといった演出となっているし(『作品研究花月』(『観世』一九八二年三月)、法政大学能楽研究所蔵『鷲流狂言伝書』(江戸中後期書写)には、「扇ヒロケ類ニアテ左リノ手ヲ花月ノ腰ニアテ」という演出も記されており、演技に小異があったと想像される。時代・流派によって演技に差異があるにしろ、相手の体に手を掛けて謡うという能の中では特異な演技をすることには変わりなく、作品の背後にある「美少年趣味」を想起してしまうのである。

確かにこの二つの要素は、〈花月〉という曲を考察していく上で大切な視点である。しかし「美少年趣味」が曲の細部にわたって見られるわけでもなく、「芸尽くし」といつても一つ一つの芸の独立性が強く、このすべてを一緒くたにすることにも無理がある。この二つの視点を一先ず置いておくことで、〈花月〉の新しい側面が見えてくるはずである。本稿では、これまであまり取り上げられなかった「弓を射る物まね」(以下「弓の段」と仮称)に注目しながら、この曲における「春」という空間の重要性について考察していく。まずシテの弓についての先行研究を検討した上で、花月の弓が遊戯の「小弓」と関係していたことを示していく、最後にこの「小弓」が春という空間と密接な関係があったことを基に、「弓の段」の重要性について考えていきたい。

以下、〈花月〉の詞章は岩波日本古典文学大系『謡曲集下』(岩波書店 一九六三年)を用いる。

二 花月の弓

「弓の段」は前述の「小歌」に続く場面であり、シテに突き飛ばされたアイが「落花狼藉」の鶯を見つけ、それをシテが持っていた「弓」で仕留めようとする場面である。

この場面も「男色」という視点を基に解釈がされることがある。「申楽談儀」付載記事にある「好色、博奕、大酒、鶯飼う事、これは、清次の定也」の中の「鶯を飼う事」は男色を暗示しているという指摘(戸井田道三氏「鶯」(『観世』一九六八年八月)があるが、これを踏まえて徳江元正氏は、

いや。是成花に目が有よ。能々見ればめでハない、うぐゑすが花ふみちらす。にくひ事じや。幸持せられたる御弓にてあのうぐひすをいて落させられ候へ

(貞享松井本(能楽資料集成『貞享年間 大藏流間狂言本二種』わんや書店 一九八六・一九八八年)

というアイの台詞の「目が有るよ」とは、単なる鶯ではなく、他の男の視線、つまり男色的要素として考察されている(『作品研究花月』)。しかしこの鶯が「男」だとしたら、それに弓を向けるのは不自然であるし、「小鳥(しようちよう)」であることを響かせている「弓の段」の内容とも不調和であるので、この解釈には違和感を覚える。

こうした「美少年趣味」的な解釈に対して、別な視点を提示

したのが、天野文雄氏の「〔花月〕の禪的趣向」(「おもて」(大概能楽堂会報) 七十六号、二〇〇三年四月)である。天野氏は「そもそも禅寺の喝食である花月がなぜ弓矢を持っているのであろうか」という問題を提起し、「〔放下僧〕」の例を引きながら、禪的要素に起因していると結論づけている。詳述すると、次の通りである。

〔放下僧〕でツレの牧野小次郎が、仇であるワキの利根信俊に正体をさとられないために、太刀を佩き弓矢を持ち放下に扮するが、その理由をワキとの「問答」の中で次のように説明しているのである。

〔問答〕：…ツレ、それ弓と申すは双弭に、烏兔の姿を象り、日月をここに現はし、定慧不二の秘法を表す、されば愛染明王も、神通の弓を張り、方便の矢を爪繞つて、四魔の軍を破り給ふ

〔上ヶ歌〕地、さればわれらもこれを持ち、さればわれらもこれを持ちて、引かぬ弓、放さぬ矢にて射る時は、当たらずしかも、外さざりけりと、かやうに詠む歌もあり、知らずな物な宣ひそ、知らずな物な宣ひそ。

天野氏は、放下に扮したツレが弓を持つことと、傍線部が南北朝の禅僧夢窓国師の詠歌「たてぬ的引かぬ弓にて放つ矢の当らぬ鹿も外れざりける」を踏まえていること(『謡曲大観』の注の指摘)を根拠に、「弓矢は禅に発した芸能者たる放下の持ち物であつたらしい」と考え、花月が弓を持つのもこの禪的趣向が反映していると結論づけている。

確かに右の(〔放下僧〕)の問答は、禪的教養を基に作られたの

かもしれない。しかし、これを根拠に、弓が放下の持ち物であるとし、「〔花月〕」にもその影響を見て取ることができらうか。「〔放下僧〕」ではシテ(小次郎の兄)も放下に扮するが、その時持つのが団扇である。なぜ団扇を持つのかワキに問われると、「心地修行の便りにて」などの禪に関する語句を引きながら、ツレと同様に答えるのである。すなわち、弓矢も団扇も面白い問答(禅問答)を導くための道具立てなのである。これらに関する様々な秀句を引用し、聞き応えのある問答を構成することが、この場面の主眼であると考えられるのである。また物語の展開としてもこの問答は、仇にさとられないための「方便」としてのおもしろさがある場面なので、ここに放下の真の姿を語る必要もないだろう。

放下は「こきりこ」を鳴らし、種種の曲芸・手品を演じた」(『時代別国語大辞典 室町時代編』「放下」の項)と説明されるように、様々な芸を演じた。もし弓が放下の芸の一つであっても、それを象徴した芸ではなかったはずである。「〔放下僧〕」の「問答」を、「〔花月〕」のシテが弓矢を持つ根拠とするのには異論があるところだろう。

三 「三」の段」と「小三」

「弓の段」に美少年趣味や禪的教養を見ることには疑問が残るが、天野氏の「そもそも禅寺の喝食である花月がなぜ弓矢を持っているのであろうか」という問題提起は重要であり、他の視点から考え直さなければならぬ。そこで注目したいのは、

「小弓」という遊戯である（以下、遊戯の小弓は「小弓」と表記する）。

「小弓」は平安時代から貴族や子供に賞玩されてきた遊戯であり、決められた本数の矢で的を狙い得点を競うものである。

七夕伝説と関係付けられている「楊弓」、子供の正月遊戯である「破魔矢」、雀を的代りとする「雀小弓」なども「小弓」の一種である。この「小弓」が「弓の段」と関係することはすでに先行研究で指摘されており、岩波日本古典文学大系『謡曲集下』「花月」の「主題」では、「美少年の喝食の芸尽くしの能。冒頭の名ノリの姿に似合わぬ物々しい由緒付けがすでに話芸・秀句芸であり、以下、小歌・小弓・曲舞・山巡りと芸能を連ねる」とあり、岩波新日本古典文学大系『謡曲百番』「花月」の第五段・小見出しにも、「小弓で鶯をねらう」とある。しかし

単なる小さい弓の意の小弓なのか、遊戯としての「小弓」を指しているのか不明であるし、注釈などの中で「小弓」との関連が考察されているわけではない。どのような点において「小弓」の要素が汲み取れるか、さらに追究する必要があるだろう。

そこでまず、「弓の段」の詞章を見てみる。

〔□〕シテ 鶯の花踏み散らす細脛を、大薙刀もあらばこ
そ、花月が身に敵がなければ、太刀刀は持たず、弓は射
んがため、またかかる落花狼藉の小鳥をも、射て落とさ
がためぞかし、異国の養由は、百歩に柳の葉を垂れて、百
に百矢を射るに外さず、われは花の梢の鶯を、射て落とさ
んと思ふ心は、その養由にも劣るまじ、おう面白や
〔段哥〕地 それは柳 これは桜、それは雁がね、これは

うぐいす、それは養由 これは花月、名こそ 変わるとも、
弓に隔ては よもあらじ、いで物見せん うぐいす。いで
物見せん、鶯とて、履いたる履を 踏ん脱いで、大口の稜
を高く取り、狩衣の袖をうっ肩脱いで、花の木陰に 狙ひ
寄つて、よっ引きひょうと、射はやと 思へども、仏の
戒め給ふ、殺生戒をば 破るまじ

前述したように「落花狼藉」の鶯を弓で射ようとして、「殺生戒を破るまじ」と思い留まるのがこの段の概略であるが、面白いのはこのシテの姿を「養由」と重ねている点である。

養由は、中国春秋時代に名を馳せた楚の武人・養由基のことである。例えば『史記』「周本記第四」に、

楚有養由基者、善射者也、去柳葉百步而射之、百發而百中之。とあるのが、養由の伝説を端的に表している。日本でも『保元物語』「新院御所各門々固めの事」に「養由が百歩の芸」とあり、『義経記』巻第五「忠信吉野山の合戦の事」にも「大唐の養由は、柳の葉を百歩に立て、百矢を射けるに百矢は中りけるとかや」とあるように、軍記物などで武士の弓の腕前を語る場面において、養由の話が引用されており、この「百歩の芸」が養由像を象徴しているのは周知の通りである。この場面の諧謔性は、その弓の名手である武人・養由を、たかが鶯を狙おうとするシテの姿と重ねているところにある。つまり、大袈裟に自らの振舞いを語るシテの姿から、逆に滑稽味と少年の幼さを看取できるのである。さらに波線部「いで物みせん」「よっ引きひょうと」という表現は軍記物に散見できるものであるが、前者は能でも（橋弁慶）のシテ（弁慶）や（項羽）のシテ（項羽）

の靈」という剛者が敵に対して凄む表現として使われている。いずれも喝食である花月の振る舞いとしては不釣合であり、そこにこの場面の面白さが表現されている。

この「弓の段」は、単に滑稽味のあるシテの姿を描出するだけではなく、シテの弓と「小弓」を関係づける文句も見えるのである。その一つは、シテが弓を持つことを「弓は的射んがため」と述べている箇所である。「小弓」にとつて、「的」は象徴的なものであったようで、連歌の付合書である『連珠合璧集』にも、

小弓トアラバ、鶯 かちまけ まとぬ

とある。もちろん和歌においても「小弓」と的は関係深いものであったと考えられる。

右近大將道綱の家に人々小弓射てあそびける時、まかり侍らで申し遣しける

あづさ弓いてもかひなき身にしあればけふのまどぬにはづれぬるかな（法印慈應）

返し

あづさゆみ君しまとぬにたぐはねばともはなれたる心ちこそすれ（道命法師）

（『新拾遺和歌集』十九雑歌中）

この詞書に「小弓射てあそびける時」とあるように、「小弓」の歌として「まどぬ」が読み込まれており、両者の緊密さは明白であろう。

弓は本来武器であり、戦に用いるものである。それなのにわざわざ「的射んがため」と言っているのには、「小弓」が影響

していると考えられるのである。騎者三物といわれるように、的を狙う笠懸・流鏑馬といったものは武士の武芸鍛錬のために大切にされておられ、「的」を狙うのは「小弓」だけとは限らないが、この場合は勿論この的を指しているのではないだろう。喝食であり少年であるシテと照らし合わせると、「小弓」の的を表していると考えた方がより自然といえる。

また、その後に「またかかる落花狼藉の小鳥をも、射て落とさんがためぞかし」と述べているのも「小弓」を連想させる。前述のように、「小弓」の一種には雀を的代りとする「雀小弓」というものがあるが、これは雀を糸で括り、的として、射た者がそれを得るといふ遊戯である。つまり、この場面では鶯という小さい鳥を狙う趣向は、「雀小弓」を彷彿させるのである。詞章も「落花狼藉の小鳥（しょうちよう）」とする箇所があり、この場面では弓で「小さな鳥」を狙う趣向を強調しているようにも思える。

さらに「雀小弓」は殊に少年の遊戯であったようで、『夫木和歌抄』卷三十二「雑十四」西行の歌にも、

しのためですゞめ弓はるをのわらはひたひえほしのほしげなるかな

とあり、この点も喝食の少年を描く「弓の段」と重なるのである。つまり当時の人々は、「的射んがため」という詞章と弓を手に小鳥を追う少年の姿から、「小弓」という遊戯を連想できたと考えられるのである。シテの弓はこの後の場面では使われないので、この落花狼藉の鶯を懲らしめる手段としてのみ登場する。この手段としては、他にも様々な方法・道具を考えるこ

とができるだろう。その中でなぜ「弓」を用いているかといえ
ば、「小弓」から着想を得たと考えると、納得がいくのである。
以上、〈花月〉の「弓の段」は「小弓」という遊戯が背景に
あることを確認した。喝食の少年である花月の無邪気さが、「小
弓」で雀を狙うことでより鮮明に描かれているのである。しか
しこの「弓の段」が花月の少年としての幼さを描出するだけの
ためにあつたとは言えない。花月の弓が「小弓」であつたのな
ら、この「弓の段」は曲全体の空間と緊密に結びついていた場
面であつたと考えられる。そこで注目したいのは、「春」とい
う季節である。

四 「春の遊びの鞠小弓」

桜・梅・鶯・霞など春の風物は数多くあるが、「小弓」もま
たこの季節を象徴する遊戯であつた。そのことは次に挙げる正
治二年（一一〇〇）慈円から後鳥羽院へ詠進された『正治後度
百首』の中の和歌からも分かる。

秋の稲のをさまれる世のうれしきは春の遊びの鞠小弓まで
これは、秋の収穫・治世を讃えた歌であり、春の情景を読んだ
ものではないが、ここで「春の遊びの鞠小弓まで」と詠まれて
おり、蹴鞠・小弓が春を象徴する遊戯であることを踏まえた一
句となつている。この歌が示すように、「小弓」が春の遊戯で
あつたことは自明なことであるが、本稿において、春と「小弓」
の緊密さを確認することが不可欠なので、さらに詳しく見てい
きたい。

平安時代以来蹴鞠・「小弓」が春を彩る遊戯として描かれて
いることがある。例えば『源氏物語』「若菜上」では「三月は
かり」に、源氏が「今朝、大将の物しつるは、いづかたぞ。い
と、さうさうしきを、例の、小弓射させて、みるべかりけり。」
と光源氏が六条院に来ていた夕霧たちに「小弓」をさせればよ
かつたと嘆く場面があるが、この時夕霧たちは蹴鞠に興じてい
るのである。またこの後夕霧と柏木が別れる場面で

春、惜しみがてら、月の中に、小弓持たせて、（六条院に）
まゐり給へ（日本古典文学大系（岩波書店）よりの引用。へ）

内は筆者注）

と約束する場面からも「小弓」と春の浅からぬ関係が想像でき
る。また『とはずがたり』では、有名な女薬事件を引き起こす
原因となつた後深草院と龜山院の小弓の勝負が二月の頃に行わ
れているし、一回目の勝負での後深草院の「負けわざ」が、女
房たちに蹴鞠童の装束を着せて龜山院に披露するといったもの
であつた。さらに『義経記』巻第七「平泉寺御見物の事」にも

富樫が城を見れば、三月三日の事なれば、傍には鞠小弓の
遊び、傍には鬪鶏、又管絃、酒宴にぞ見えける。（日本古
典文学大系（岩波書店）からの引用）

とある。いずれも蹴鞠と「小弓」が結びついて登場する例であ
り、その季節が「春」なのである。

このように蹴鞠・「小弓」の両方が春に縁のある遊戯であつ
たが、殊更春との結びつきが強かつたと考えられるのが「小弓」
の方である。それは次の文芸作品以外の資料からも確認できる。

A 諸門跡ノ藝ハ。詩歌茶香ノ會。春ハ雀小弓也。然シテ近

代春蓮院尊道親王。理性院僧正宗助。囲碁會張行有之云々。
不可有事也。東寺ノ門徒殊可斟酌者也。〔海人藻芥〕〔群
書類從雜部〕所収)

B小弓引 昔内裏にて此事あり、地下にも春の遊びとす。

〔改正月令博物筌〕〔交盛館 一八九五年〕

Aは応永二十七年(一四二〇)に恵命院権僧正宣守が著した有職故実書であり、貴族や僧侶の日常生活に不可欠な知識を解説したものである。ここでは「諸門跡ノ藝」と限定はしているものの、「春ハ雀小弓」と明確に記されている。但し当時の貴族の日記などを見ると、必ずしも春に行われているわけではない。例えばこれとほぼ同時代の、伏見宮貞成親王の日記「看聞日記」では、五々七月に「小弓」が催されている例を散見できる。しかし、すべての統計を取ったわけではないが、総じて春に行われている記録の方が多く、『海人藻芥』の記事と呼応していると言える。

Bは文化五年(一八〇八)貝原益軒の『日本歳時記』を基に鳥飼洞斎が著した俳諧の季寄である。〈花月〉が成立した時代からはだいぶ下の資料ではあるが、季節感を大切にしている俳諧の書物で、このように書かれていることには注意する必要があるだろう。蹴鞠(鞠) 自体は季語になっていないが、「小弓」「小弓引」「雀小弓」はいずれも春の季語となっている点からも、「小弓」と春との緊密さは明白である。

平安時代から、中世、近世を通じて「小弓」は春の風物であったが、ではなぜ「春の遊び」なのだろうか。「雀小弓」はともかく、「小弓」は基本的には屋内でも行える遊戯であり、季節

・天候に関わらず楽しめるはずである。実際前述の通り、春以外にも「小弓」が行われていた記録はあり、「春の遊び」とされる根拠がはっきりしない。

「小弓」と春の縁には、様々な要因があったかもしれないが、この季節に好まれたことの理由の一つが次の資料に見える。

一時節の事

嗜此道之家、不嫌時刻雖致稽古、以春被賞翫者也、おほかた日うら、かに風しづかならば、可成其興也、但ものしむ事は晩景也、何賞之、凡季節事、夏は炎暑も難堪、又弓のためにべくつろぎて、弓をはる事不任意之間、其興少、冬又風はげしくて、或的をうらがへし或矢を吹いたまじむる間、其興みだれてします、極熱聊寒其以不宜、秋は又弓ため被浸露露事あり、能々可斟酌者也、依以春被賞也。(小弓肝要抄)〔雑芸叢書〕所収。国書刊行会 一九一五年)

『小弓肝要抄』は、室町中期に藤原基盛が編んだ「小弓」の技術書である。「小弓」の専門書は近世にかけて数冊出版されているが、管見に入った中では、この書が最も早い成立となる。これに拠ると、「小弓」にとっても自然条件が重要であったらしく、「炎暑」「風」「霧露」など遊戯の障りになるものが多かったことが解る。屋内遊戯とはいえ、庭先や縁側のようなところで行うことが多かったためだろうか、最も穏やかな季節である春が好まれたと考えられる。「嗜此道之家、不嫌時刻雖致稽古」とあるように、稽古などどの季節でもできたのだろうか、この遊戯を十分に堪能するためには、「春」という空間が必要だったのである。「小弓」の技術書の中にわざわざ春という季節の

大切に触れていることには注目してよいはずであり、ここで
の記述が一般的にも広く認識されていたことが想像されるので
ある。

以上、「小弓」が「春の遊び」であることを確認してきた。

季節の変化とは無縁の遊戯のように感じられるが、どんな形で
あれ、この遊戯が出来れば良いというものでもなかった。「お
ほかた日うら、かに風しづかならば、可成其興也」であったの
であり、この遊戯の面白さを最大限に引き出してくれる「春」
と密接な関わりがあったと言える。すなわち、この季節の「日
うら、か」で穏やかな雰囲気を表現しえる遊戯が「小弓」であっ
たのである。

五 〈花月〉の「春の遊び」

繰り返しになるが、〈花月〉は花の盛りの清水寺を舞台とし
た曲である。シテの名前は

ある人わが名を尋ねしに答へて曰はく、月は常住にして言
ふに及ばず、さてくわの字はと問へば、春は花夏は瓜秋は
菓冬は火、因果の果をば未後まで、一句のために残すとい
へば、人これを聞いて（三段〔名ノリ〕）

とあるのに、「果月」とはせず「花月」とするのが一般的なの
も、この曲において「春」という要素が重要であることの証で
あらう。

この季節感の重要性は、今まで漠然とは認識されていた。し
かし、〈花月〉全体を見てみると、「春」に関する描写は意外と

少ないことに気が付く。この曲の主眼となっているのは、次々
と繰り返されるシテの芸であるが、小歌・清水寺の曲舞・羯鼓
・山廻りの謡いずれも「春」との関係は希薄である。シテを「花
月」とするのには、曲自体に季節感が表現されていないのは不調
和にも思える。

だが、シテが弓を持つ理由を「春の遊び」である「小弓」に
求めるのなら、この曲の季節感も格段と鮮明となる。つまり花
が咲き満ちる清水寺で、喝食である少年が行うのに最も相応し
い芸能として「小弓」の使われていると考えられるのである。
さらにこの考えを補強するのが、シテが登場した後の四段「問
答」である。

アイ「なにとて今までは遅くおん出候ふぞ シテ「さん候
ふ今まで雲居寺に候ひしが、花に心を引く弓の、春の遊び
の友だちと、中違はじと参りたり

この台詞は〈花月〉の中で、春という季節が最も鮮明に語ら
れている箇所である。「雲居寺」は（自然居士）の舞台にもなっ
ている桜の名所であるが、シテはそこから同じく桜で有名な清
水寺にやってくる。また、「引く」に「心がひかれる」と「弓
を引く」を掛け、「はる」に「春」と「張る」を掛け、「引く」
「ゆみ」「はる」の縁語を並べるといった和歌の修辞を利用し、
詞章の中にも「春」という季節と「弓」を関係付けながら、そ
の両者を響かせている。

このような修辞は和歌などにも度々用いられ、決して珍しい
ものではないが、ここでわざと「春の遊び」と述べていること
に注意したい。従来はそのまま「春の遊び」と解されていたこ

の文句は、暗に「小弓」を示していると考えられる。「引く弓の、春の遊び」を「小弓という春の遊び」とも解釈できるし、慈円の歌にあった「春の遊びの鞠小弓」とも重なる。やはりこの「問答」もシテの弓が「小弓」であることを暗示した内容となっているのである。

この「問答」の後は、小歌を挟んで「弓の段」となる。桜の花の下、「雀小弓」を模した趣向は、「雀」の替りに「鶯」を狙うことで一層春めいた風情を醸しだしている。(花月)の前半は、まさに「花月」の名に相応しく清水寺の「春」という空間描写が主眼となっているのである。シテの弓は、(花月)に在る「春」を具現化する働きがあったと考えられるのである。

六 むすび

以上、「小弓」が「春の遊び」であり、「春」という空間で少年が見せる芸として、最も相応しいものであることを考察してきた。(花月)にある様々な芸能の中で、シテの身体・春という空間の両方と密接に結びついているのがこの「弓の段」であったといえ、この曲にある季節感、この芸によって支えられていたといっても過言ではないだろう。すなわち、無邪気な少年の姿・芸能の物まね、そして春という季節が、この「弓の段」に凝縮されているのである。現在の演出では、シテは小弓とは言えぬ大きな弓を携え登場するが、本来もつと小さい弓を持っていたと考えられることも十分可能であろう。この芸は、単に芸尽くしの中の一つであったのではなく、(花月)の作者が意図し

た空間を構築するために不可欠な要素だったのである。

【注】

- 1 代表的なものは、竹本幹夫氏の「親子物狂能考」(『能楽研究』六号 一九八一年、後「観阿弥世阿弥時代の能楽」(明治書院 一九九九年)に所収)と大谷節子氏の「物狂能の変遷」(『国語国文』一九八三年十月)である。
- 2 他に細川涼一氏が『大覚寺譜』の記事に触れながら、花月の弓が「小弓」であることを示唆されている(『逸脱の日本中世』狂気・倒錯・魔の世界(『洋泉社』一九九六年)第二章「中世寺院の稚児と男色」)
- 3 ここで「それは雁がね」と、養由が雁を射たとしているが、中国の諸文献には見られない。ここは『平家物語』巻第四「鶴」の「昔の養由は雲の外の雁をいき」を踏まえていることが、岩波日本古典文学大系『謡曲集 下』に指摘されている。
- 4 曲名を(果月)と表記するのは、室町記の下掛り古写本に多い。詞章から判断すると「果月」とするべきだろうが、季節などを考えて「花月」とするべきだということが、天野文雄氏によって指摘されている(『花月』の禪的趣向)。

(いかい) たかみつ・法政大学能楽研究所兼任所員)